明治四十四年六月十四日逓信省第三種郵便物認可

岐蘇林友

明治四十四年七月二十五日印刷
明治四十四年八月二十七日發行
（定價三錢）
編纂兼發行人　長野縣西筑摩郡福嶋町四〇四番地　安井正夫
印刷者　長野縣松本市本町百八拾四番地　兎澤忠雄
印刷所　仝縣仝市仝番地　交文社
發行所　長野縣西筑摩郡福嶋町二八九番地　蘆澤書店

○本誌目次

○論說　執筆の辭　七宮純雄
長野縣下に於ける公有社寺民有林の伐採量と植栽とに就きて　小松
○學術　庭園としての灌木　一樹一木（栗）
○拔萃　林業年中行事　木管に關する調査　鐵道枕木としての掬材の試驗
○文苑　竹馬の友垣、此君漫錄　偶感、木曾義仲、山學校より、察より、福島便り　金田君より、本多君より　川岸君より
○通信　四十三年度校友會會計報告　卒業生會費領收報告　客員會員轉任報告
○雜報　編輯部より

論說

執筆の辭

七宮純雄

嗚呼偉なる哉木曾の山河、願はくは健全なれ

是れ余學生時代修學旅行として最初此地に來り其雄大にして而かも清淨加ふるに利潤多き寶庫に對し不知不識余の口より迸せし驚駭の聲なり寧ろ敬慕の聲なりき

其後幾多星霜を經本年五月生徒を指導し再び此地に來る時に不幸なるかな夜來の風雨に限ある日程を阻碍され我思を墳にすること能はず怨を呑んで客車の人となり僅かに車窓より俯して走るが如き靈覺の床仰いて廻るが如き御岳山頂を僅かに眺め得たるのみ噫

七月十日三度此地に來る而かも今回は前者とは大に其趣を異にし親愛なる生徒諸子を敎育するてふ大命を帶び此地に來る其任や實に重且つ、大徒らに山河の美に心奪はれ呆然たる暇あらんや不肖ながらも大に努力し山河の救主を出さんとす木曾の山河うれ

是れを諒せよ

天然は一切破壞力なり時々刻々常に萬有を破壞して止まず實に聳ゆと巍然たる山岳すら此破壞力に敵することなく能はず從て此のもの、恩惠を蒙り潺湲たる溪流も亦た永久不變なる能くす見よ嘗ては樹木鬱茂綠濶らんばかりの靈山も漸次岩骨を露はし見る蔭もなき禿山に化しつゝあるにあらずや潺々たる清流も次第に河床高まり暴雨に際しての濁流の河岸に激するにあらずや嗚呼昨日の山河は既に本日の山河にあらざるなり然れども木曾の山河は比較的よく是れ等破壞力の暴威に任せず斷乎として曩日の面目を維持しつゝあるは天にあるか人にあるか將た夫れ自身にあるか余をして益々敬慕の念を深からしむ

夫れ四周の風景よく其地方住民の氣風に至大の影響を及ぼすと我親愛なる生徒諸子殊に林學てふ實地的なる學問を研究しつゝある生徒諸子よ自然は尤もよき敎師なり諸子は朝夕此風景に秋の且つ此尤もよき敎師の敎を受けつゝあるならん諸子は凡り林學を研究しつゝある生徒中恐らく尤も幸福なる生徒なるべし願はくは此壯嚴なる山河の敎訓をよく遵奉し一は實際的に斯學の蘊奧を研め一は精神的に凡ての敵に對し頑强に抵抗するてふ堅忍不拔の氣風を養成し肉体も亦た精神も共に健全なる而して山河の救主となり大に奮勵せよ余も亦た諸子と共に此靈山河の恩惠に浴するに努めん聊か以て執筆の辭となす

長野縣下に於ける公有社寺民有林の伐採量と植栽とに就きて

小松

長野縣下に於ける公有社寺民有林の總反別は二十四万二千七百九十六町原野反別は十四万七千九百六十五町歩に達す而して約十四萬八千町歩の原野は殆と無立木地にして秣草地なれば多少なりとも立木の存在せるは二十四萬二千八百町歩の山林なるべし假令實測の結果山林反別增加すとも民有林の多くは殆ど荒廢せるもの少からざれば立木地面積は臺帳面積二十四萬三千町歩を出でざるべし而して人工植栽の廣く民間に行は

るゝに至りしは近年にして造林地の立木を伐採する程生長したる個所甚だ少かるべく即ち別表伐採木表に示す如く天然林の主林木なる樅栂松の伐採材積非常に大にして杉檜等より遙に超過せるを見るも明かなり

余は縣下私有林の現在の蓄積を明にすること能はされども一般に私有林は荒廢に傾きたる狀態を常に至る所に目擊するを以て其蓄積の甚だ小なる疑ふべからず

されば伐採量過多にして植栽の之れに伴ふことなくば縣下の私有林は遂に禿山に陷るべく土砂崩壞して山骨露出するの時期あるを覺悟せざるべからず即ち生長量より一層大なる材積を伐採利用するときは林地は早晩無立木地と化せざるべからず

特に林木は成熟するに長年月を要するが故に一且林地荒廢すれば非常に大なる勞力と長き時期を費して回復することを得るものなれば合理的林業にありては法正の成長量より多くの材積を伐採せざるを原則とす

今茲に本縣下の公有社寺民有植栽地面積を掲ぐれば

	四十一年 (町)	四十二年 (町)	平均 (町)
樹種 扁柏	747,3	397,9	572,6
杉	361,0	623,7	492,4
松	288,3	292,6	290,5
落葉松	2246,7	1178,5	1712,6
樅	5,0	1,0	3,0

此表を基礎とし平均伐期を何れも八十年と定め收穫表より材積を計算すれば約次の如し

扁柏松を二等地とし杉を三等地とし伐期平均生長量を扁柏二十五尺〆杉三十二尺〆松及落葉松を二十一尺〆とするときは各樹種の生長量は次きの如し

扁柏 一萬四千三百十五尺〆
杉 一萬五千七百五十七尺〆
松 六千百尺〆
（落葉松三萬五千九百六十五尺〆

而して此等生長量算出の因子たる伐期平均生長量は法正林のものを用ひたれば彼の不合理に經營せる利有林には過大のものなり故に縣下私有林の毎年の生長材積は之れより遙に小なりと云はざるべからず左に公有社寺民有林伐採量を掲ぐれば

樅を例外として除くときは前植栽表と對照するに便なり此表は用材材積なれど薪材に於ても松九千五百尺〆落葉松六百尺〆を伐採せるを以て伐採量と生長量と比較するときは次の結果を見る

伐採の過多なるもの

杉二萬四千六百八十三尺〆にして杉造林面積四百九十二町の更に二倍造林せざれば此不足を補ふ能はず松は十四萬余尺〆不足を來す勿論松林は人工植栽によらずともよく天然生を仕立つることを得るの便あれども植栽面積の過小なるを知るときは伐採跡地の地力減退を想像することを得べし

樹種	四十一年 (尺〆)	四十二年 (尺〆)	平均 (尺〆)
扁柏	8,612	8,293	8,453
杉	36.319	44,562	40,441
松	199,248	94,136	146,692
落葉松	36,498	14,812	25,655
樅	4,708	309,427	157,067

落葉松及扁柏は伐採量稍小なるものにして両者合して一萬六千尺〆に達せども未だ松及杉殊に樅の不足量を充す能はず

されば縣下に於ける私民林は造林面積甚だ小にして伐採すること過大なりと決論するを得るを以て年と共に地力衰へ林地の生産力は遂に漸減して荒廢の極に達するものと云ふも不可なかるべし

其外栂栗欅樅等の伐採額は両三年の平均を見るに合計二十三萬尺〆に達せり此樅栂等の伐採量は天然林を減しつゝ進行せるものと見るべく人工植栽の部には此等の樹種は殆ど之れなきを以て天然林の蓄積も亦日々減少しつゝあるを疑ふべからず而して植栽面積伐採量は最近長野縣統計によるものなれど伐採量に至りては統計以外一層大なるものあるを普通となすを以て私有林の木材全滅せんことを憂ふること切なり

加ふるに統計の示す所によれば三十九年以來人工植栽は其面積增加せず扁柏 落葉松の如きは減少せり然るに伐採材積は年と共に激增して就中樅材の如き三十九年度には僅に八千尺〆弱なりしが四十二年度には殆ど三十一萬尺〆に達せり扁柏も亦三十九年には四千五百尺〆なりしが四十二年には八千三百尺〆を伐採せり其他伐木利用の途は增加するのみなるに於ては愈々兩者の不平均を大なりしむるものなれば造林奬勵の一層緊要なるを知るべし

學術

庭園樹としての灌木

純

世が進歩すると何うしても頭腦や身体を使ふ事が多くなる從つて是等疲勞を慰むる途を求めなければなるまい慰勞の途には種々あるけれども就中庭木盆栽の道樂の如きは尤も高尚で純潔で且つ尤も健康的なものと思ふ殊に煉瓦造や人の顏但しは工場の煤畑なぞのみ見て働く都合の人若しくは冬季になると山も野も樹木も家屋も總て白くなる雪國の人には床の間に飾られたる一個の青々したる鉢植で余程其日の疲勞を慰むる事

が出來る喬木は壯大にして誠に結構だが貴族富豪の濶大なる庭園にあらざれば面白くないのみならず喬木は强て是に用ひなくとも利用の途は幾等もあるから有害無益と呪はれて居る灌木を奬勵する而して是れは子供にも容易に出來る事だから所謂愛林思想の第一歩ともなる勿論今日にても庭園樹として灌木を用ひては居るが願はくばより豊富に生ひたい

「タウン、ガーデニング」と云ふ書には「ニシキヾアヲキ」「ハナスグリ」「ムラサキハシドイ」「サンザシ」「シャクナゲ」等に就て非常に賞めてはあるが余り感服する事は書いてない其内で「シャクナゲ」の手入に次の樣な事が書いてある。

乾燥せる天候を利用し屢々充分たる肥料水を與ふべし併し尤も重要なる点は濕潤なる天氣の外は始んど絶えず水管を使用して植物体を清潔にすることなり水を節約するなら而して水は枝葉を害せざる限り充分烈しく四方より與ふべし兎角勢强き洗滌することは都會内の總ての喬木灌木殊に大なる葉或は光澤ある葉を有する植物体の安寧を保護する爲めに最も重要なり而して是れは「シャクナゲ」に尤も利益ありと

一樹一木（其七）

小松吉次郎

栗

猿蟹の合戰に栗は布設水雷の効果を奏して見事敵を苦めし物語は今も耳底に殘れども其味を知りては猛けりし火も消ゆるまで數多埋めたき唇は灰に色づけられても貧り食ふ習あり古くは萬葉集にも「三つ栗の中にむきたる晒井のたえず通はむりこに妻もがも」或は古事記にも「三つ栗の其中つ泥をかふつく眞日にはあらず」云々とて隨分昔より栗の名は物心なき童より歌詠む人にまで知られきと覺ゆ或は近江國に天を衝く大木ありて年々幾萬の葉落ちて土壤となりし由

三才圖會に見へたり

又栗の果實は堅ければ夜話の戯れにも神田鍛冶町の角の乾物屋のかち栗堅くて々々云々とありて堅固なるものとして目出度事にも多く用ゐらる今も忘れられぬは日光の栗羊羹の美味なり聞きしに劣るは新井目黑の栗餡にて名物に味いものなき例にもれず名ばかりの栗數少うして再ひ味うべからず

栗は我國至る所に生長す野火多き原野には大木殘りて火に强き性質を示せり芝栗として實も木も小きものあれど丹波栗として特に果實の珍らしく大いなるあり一つの毬彙の中に普通は二個三個入り又一つ栗として只一つのものもあり

喬大なる栗の幹は太く逞ましき大枝を分ち大枝は小枝を出し小枝は細枝を有して繁れ慕ふ幼兒の如く乳養する慈母の如き關係あり木曾の美林中に數多の栗木混淆せるは其初め扁柏花柏か此木の保護をうけしを示すものにて天然林の多くは前生樹の庇護によりて完成すべき事實を吾人に敎ふるものなべからず又枕木は立木一尺締より平均四本乃至五本製作し得るものなれば五十三萬尺締乃至四十三萬尺締の原木を年々生産すべき所謂鐵道備林を經營せざれば倒底完全に我國の交通機關を利用すべからず假令木材防腐の術進歩すとも此を半減すること困難なるべく加ふるに鐵道延長は增加するのみなれば防腐劑の効果と相殺するを得は幸なり此の如く多量の木材を逐年確實に産出せんには五万町歩の法正林を要すべしされば鐵道備林は線路附近に設け殊に防風防雪の

すてられて木の葉にまじるみなし栗拾ひ殘せり秋やへぬらん

などは淋しい心地を表せりされど葉は徒に落ちず樹下に冬籠りせる幼樹或來春發芽すべき種子咲き亂れては美はしき草を雨雪より守る爲にこう散り行くなり氷雪に閉ちられて凍死せん幼な子を救はんとて風に伴はれて散りゆくなり何とて落葉を悲むべきぞ

栗の材は堅密にして割裂性に富み加工容易なり加ふるに持久力强く土工用として他樹に優れり殊に枕木として益其必要を感ず枕木の大さは異れど我國多く用ふるは長七呎幅九寸厚五吋清國廣軌には長八呎幅九吋厚六寸西北利亞線東清鐵道は長八尺七寸幅八寸四分厚四寸二分東京市街鐵道は長七尺幅七寸一分厚四寸一分あり而して我國鐵道延長は日進月歩の盛運に向ひ第一期豫定線は完成し第二期第三期線の布設に着手せんとす或は輕便鐵道は各地延長し市街鐵道は分秒も休止せず布設す今や鐵道網は全國を連結して蛛蜘巣に似たり其延長六千哩に達せり而して枕木は保存年限平均六ケ年なれば毎年一千哩は枕木の改修すべき理にして一哩に要する枕木は二千百二十四挺なれば實に年々二百十二万四千挺の枕木を備へざるべからず又枕木は立木一尺締より平均四本乃至五本製作し得るものなれば五十三萬尺締乃至四十三萬尺締の原木を年々生産すべき所謂鐵道備林を經營せざれば倒底完全に我國の交通機關を利用すべからず假令木材防腐の術進歩すとも此を半減すること困難なるべく加ふるに鐵道延長は增加するのみなれば防腐劑の効果と相殺するを得は幸なり此の如く多量の木材を逐年確實に産出せんには五万町歩の法正林を要すべしされば鐵道備林は線路附近に設け殊に防風防雪の

必要ある北越奥羽地方に備へ冬期は風雪の害を除き夏季は新緑風を含み旅客をして酷暑の苦を忘れしめ三四十年にして桃木を得一舉両得此れより大なるはなかるべし

終りに當地の栗拾ひの狀況を記して此文を結はんとす木曾の地栗の大木多く針葉樹林中に至る所に散生せり栗は年々結實少く數年に一度豊作す秋に至り手もあてられぬ毬座より赤き面少しく出して人を呼ふかの如く見ゆれば招かれて行かざれは禮を欠くと思へるか老若我れも〳〵と競ひ拾ふ樣は不倶戴天の仇敵を尋ぬるが如く夜となく晝となく廣き山深き谷木立の中を隈なく探りつゝ拾ふ沙漠に金剛石を拾ふ光景は知らざれども其盛なること驚くに絶えたり常に朝寢にて太陽を見ずば起床せざる少年も此時ばかり法外にも二時起きして露しげき草群を松明にて分け行くは狂氣の沙汰と覺ゆ數百の者手々に松明を持ち晝尚暗き城山に分け入る夜中の眺めは不知火もかくやと疑はれ子供心に聞きし狐火は此れかとぞ思はれき一升二升と拾ひ集めし栗は大小を分ちて蒸して糸にかゞり圍ひたく時は虫つかず之れを冬の夜長に一家團欒の樂園に持ち出し炬燵の上にて話しながら食ふを無上の事とせり此樂を得ん爲に霜の朝勵みしかと思ふ

拔萃

林業年中行事（續）

九月の部

内業

一、秋植用の器具類を取揃え且植付人夫招集の手配をなすべし

二、翌月より製腦の好季節に入るを以て其準備として之に要する器具器械を取揃へ竈釜小屋及焚夫小屋の修繕築設をなし且焚夫雇入の手筈をなすべし

苗圃

一、引續き除草を行ふべし

二、施肥は遅くも本月上旬頃迄（寒地は八月末頃迄に）終るべし若し其後に於て尚之を行ふときは苗木は秋末に至るも永く其生育を保續し爲に秋芽の部分軟弱にして霜害に罹り易きのみならず輸送並植付共に其成蹟不良に陷るものなり

三、上旬に至り（寒地は八月下旬）日除を取拂ひ豫め霜除の準備をなし置くべし

四、長野地方に於ては秋季彼岸前後に於て落葉松の毬實濃紫色を呈するを待ち其未た開口せざる前に採收す

五、下旬より秋季床換を行ふべし

六、暴風雨の時期なるが故に排水に注意すべし

七、堆積肥料の準備を始め且氷凍期に近寄らざる前に於て翌春必要なる水肥貯藏用の壺を設くべし

造林

一、引續き下刈を行ひ本月を以て概ね終了すべし

二、寒地に於ては下旬より秋季植栽を始むべし寒地に於ては春季殘雪未た解けさる前往々苗木の新芽發生して爲に植付の時期遲るゝことあるを以て却て秋季植付を可とする場合多し

三、本月より十一月に亘り天然更新豫定地の地表攪起しをなすべし

保護

一、秋季に於ける出水の季節なるを以て林道橋梁の保全に注意すべく且河川工事を見合すべし

二、松毛虫の幼蟲及金龜蟲類の幼蟲（即ち根切蟲）孵化するにより力めて之を驅除すべし

三、松の黄蜂成蟲となりて産卵するが故に其幼蟲を驅除すべし

四、松の綠葉蜂葉間或は梢部に結繭して蹈となるにより之を潰殺すべし

五、栗蟲は本月より十月に亘り蛾となりて産卵するにより力めて之を撲殺すべし

利用

一、引續き秋伐を行ふ但し杉の如きは其結果八月伐と大差なきも時恰も秋冷に向ふを以て剝皮に手數を要し且乾燥に不便を感するの不利あり

二、吉野地方に於ては本月を以て化粧桁及床柱等に使用すべき杉扁柏の洗丸太材伐採の最良季節となす蓋し剝膚白く光澤色澤共に鮮麗なればなり

三、引續き木材運搬を行ふべし然とも川狩に在ては時恰も出水の季節なるを以て大に警戒を加へされは一朝谷川の汎濫に遇ひ一時に數萬の良材を流失して不測の災害を被ることあり

四、推薦秋子の作り込みは土地の狀況及氣候の如何により異なるも一般に本月下旬より十一月上旬迄を其季節となす

五、鞭根の採收期間は本月中旬より翌春三月上旬迄を適當とす蓋し鞭根とは淡竹苦竹小三竹及黑竹の四種に限り深山幽谷の竹林内に求むるものにして九州最も多く四國中國幾内東海東山之に亞くと雖就中暖國の品質を佳良とす

六、本月上旬（彼岸前十日迄）五倍子を採収すべし若し遲るゝ時は五倍子内の幼蟲孵化し其一部に孔を穿ちて飛去るを以て大に價格を損するものなり

七、本月より降雪の候に至るまで蕨粉の

秋季製造をなすべし就中秋分前後を最良とす且之に伴ひ根の粗滓中長き者を以て蕨繩を絢ふべし尚薯蕷からすうりの根より各澱粉を製し又蕨鍬の根より鳳尾焦澱粉を製すべし

雜

一、北海道て於ては本月十五日より狩獵をなすこと得

二、本月下旬より十月に亘り鮎の産卵期なり

三、鹿は九十両月の頃交尾を始め一ヶ月半繼續し姙娠約四十週間にして翌年五六月頃分娩す其産仔數は一頭なるも稀に二頭なることあり

拔萃

木管に關する調査

（山林公報載）

第一木管の材料

木管製造用材は「カリフォルニヤ」「レッドウード」或は「ワシントン、ドークラス」「ファー」なり

第二木管の種類

一「コンチニューアス」「ステーヴ、パイプ」直徑十吋より十呎に及ぶ

二メシーン、バンデット、パイプ直徑二吋より二十吋に及ぶ

第三水壓低抗力四百呎までの落差或は毎年方吋に付き百七十三ポンドの壓力に耐ゆ

第四木管の用途市内水道工事用灌漑用採鑛及動力用、水力採鑛用、下水用、送用、電浚渫用、蒸氣管被覆用

第五木管使用の一般的利益

一水の爲めに保護せられ腐蝕又は錆ひることなし

二硫黄礦水瓦斯の爲に腐蝕せず

三酸又は鹽類の爲に破損せらるゝことなし

四其送水力は鑄鉄管よりも割大なり又金屬管は永久變ることなし

五木管は管内を流るゝ液体を汚損することなし

六木管は氷結するとも破裂することなく木に彈力あるを以て破裂を防ぐ

七之を敷設するに際し金屬管よりも勞力を省き經驗を要せず

八凍結に基く被害少なきが故に金屬管の如く地中に深く埋設するに及ばず

九鋼鐵管　鑄鐵管又は錬鐵管よりも廉價なり

十耐久力は薄き鑄鐵又は錬鐵管に優り鐵に等し

第六用途より觀察せる木管の特徴

（水道用）木管は他の耐壓管よりも耐久廉價送水力の大なること及水を汚損せざることの諸點に於て市内水道工事用を適す

（灌漑用　木管は如何なる場所に於ても如何なる大さ及長さにも製作することを得べく又他の耐壓管よりも廉價に運搬製作なし尚降霜の爲めに汚損せらるゝの諸点に於灌漑用に適す

（礦業及動力用）木管は硫黄及礦水の爲めに腐蝕さるゝことなく又管内の液体に化學的變化を與へず又金屬の内部腐蝕なきの諸点に於て礦業及動力用に適す

（水力採鑛及浚渫用）木管は運搬容易にして他の金屬管よりも腐蝕少なく且つ容易に結合解体することを得るの点に於て水力採鑛及び浚渫用に適す

（下水用）木管は唯一の高壓に耐ゆる下水管にして水の爲めに保護せられ又他の耐壓管よりも化學的及礦物的溶液の被害の少なきの諸点に於て下水用に適す

（蒸氣管被覆物退電用）木管は熱及寒の不導体にして其敷設簡易に且つ電氣分解を阻止するの諸点に於て蒸氣管被覆用及送電用に適す

第七器械結帶木管

直徑二吋乃至二十四吋各管の長八呎以上壓力落差四呎までの範圍に於て製作せらる

此木管の桶板は清潔なる枯乾又は乾燥せるレットウード及ファーヲ以て作らる又此桶板はよく鍍金したる銅鐵條を以て結合し尚熱き土瀝青仝樹脂を以て之を塗る結帶は木管の外部を緊縛し多少桶板に喰ひ込む程に引締め各管の接合点に在る締紐によりて堅く定着せらる

結帶の距離及大小は木管所要の壓力如何によりて一定せず隨て其價にも相違を生ず然れども其壓力に應する丈十分强固に製造するを得

木管各節の接合端は膨をなして次の管節と密着し以て各節の結合を確固ならしむ此接合端は鑄鐵木製は鑛鐵等尚れも使用せらるれども酸類又は鹽類液体を送導するには普通木製を使用す

水道工事用、灌漑用、採鑛用、下水用、水力浚渫用、送電用としては器械結帶木管を以て最適當なりとす

金屬其他の管筒と木管とを連接せしむる爲め又は支管取付の爲には特種の取付を用る

第八連筒木管此木管を直徑十吋より十呎に及び其長さは望により百哩にも達すべし落差二十呎よりしる呎の壓力に耐ゆ而して

此連筒木管を埋設するに方りては桶板結帶其他の附屬品を一々取ワッシタル儘の形にて埋設地歩迄輸送し得るの便あり桶板は清潔なる枯乾したる又は乾燥せるレット、ウード或はフマーを用ふ桶板の各端は次の桶板に蝕込む樣に突出せる合せ木を以て接合せらるゝが故に洩浸の虞なし結合帶は組條鐵素を以てし鑛鉤により緊く木管の外壁に定着せらる

此種の木管は特に水力發電所下水大渠及多量の水を送導する水道に適す又此の木管は最も交通不便なる場所にも容易運搬し作成せらるゝのみならず耐久廉價の諸點に於て大口徑を要する耐壓管中最も便利なるものなり

シヤトルに於ける木管に關する調査

(一)木管の需要先並に其重要なる木管の用途

當會社製出に係る木管は合衆國に於ける多くの都市に於ける上水道用に使用せられつゝあるは勿論下水道用、鐵道用、採鑛用、灌漑用及水電用に使用せられ居れるが當革盛頓州に於て木管を上水道用に使用せし二三の都市を擧とれば「ワラワラ」「タマコ」及「シヤトル」市等あり就中「シヤトル」市は昨年新たに鐵管を敷設し現時は之れに主として依れるも夫れ迄に水源地たる「シダ」河より當市に到る間二十二哩當社製木管を敷設使用し居れりき「オレゴン」州「アストリア」市亦上水道用として七哩半當社製木管を使用しつゝあり而して「モンタナ」州「ビーム」市に上水道用として敷設しある三十五哩及「コロラド」州「テンバー」市に於て同じく上水道用として敷設しある約壹百哩の木管

社の供給に係るものなりと云ふ

現時賞「シヤトル」市は市區改正上高地の一部を切下げ其土砂を低地に運搬して之を埋め彼我高低を均一ならしむる土木工事に木管を使用して海水を運ひ上げ之を該高地に激き其水力を利用して高地を崩衰し其土砂を低地に流下しで之を埋沒するの用に供し居れり

(二)木管の耐久力

木管の耐久力は之を圍境緊縛せる亞鉛引鋼條の耐久力如何に關する由なるが當會社が木管製造に用ゆる最も細き鋼鐵條の耐久力は其節の調査する所に依れば約二十七ケ年なりと云ふ而して此耐久力は其埋設地が乾燥地たるとによりて格別の影響を受けざる由なるが地上に露出して使用する場合に於ては「アルカリ」性鹽類又は鹽水等の來たりて鐵條を浸蝕するが如き狀態なる時は勢ひ其耐久力短縮すべきも木管其物は若し之を通過する水量常に十分なるに於ては容易に腐朽すべきものにあらずと云ふ

(三)水壓抵抗力

管の大小を問はず水壓四百封度を限度する抵抗力を有せしめ得る由

(四)木管製造に用ゆる機械の名稱及其價格

當會社が木管製造に用ゆる各種機械は本社獨特の工夫に成れるものゝ由にて特許權を有するも本機械は之を製出して販賣することをなさず

(五)木管を使用する用材名並に其製造方法

木管に使用する用材は「ドグラスエロー」及び「フィル」等の針葉樹にして節、裂目、脂目、虫蝕等其他何等缺黑なき良材を精撰し之を極めて高度の熱室内に入れて十分乾燥せしめたる上木管の大小に應し適宜の厚さ及大さの桶板を製し之を以て木管を依り之を厚く亞鉛引せる鐵條を以て緊束し其表面に高度に熱せる「ター」及「アスファルト」を厚く流し更に之を鋸木屑の上に轉々せしむるものなりと云ふ

(六)木管の價格

木管の價格は水壓抵抗力の如何と一平方吋に付使用せられある亞鉛引鋼鐵條の量に準し定むるを原則とするが故に木管製造原料の市價高低により價格常に一定ならず此の故に若し水壓力の程度及管の大小を仔細に列擧するに非されば其價格を抽出する事能はずと云ふ

(七)木管は合衆國に於ては專賣特許品に非ず

鐵道枕木ごしての掬材の試驗(山林公報)

著者は掬の材を左の方法に從つて試驗せり

1、健全なる中年の紅色心材なき木材を冬季伐採し直ちに藥液注入を行ふ

2、健全なる中年の紅色心材なき伐採後六ケ年の後藥液注入を行ふ

3、健全なる中年の紅花心材なき木材を夏季伐採し直ちに藥液注入を行ふ

4、健全なる中年の紅色心材なき木材を夏季伐採し六ケ月後藥液注入を行ふ

5、成可く高年の然し尚健全なる木材を冬季伐稀し直ちに藥液注入を行ふ

6、少しく紅色心材を有すか高年の木材冬季伐採し直ちに藥液注入を行ふ

1乃至6の試驗には石炭酸を含有するタールを用ゆ

7、中年の健全なる木材の夏季に伐採せるものを用ひ三ケ月の後鹽化亞鉛と少りとも凡五瓶のタールを一枕木に注入す

右七種の試驗に用ひたる枕木の數壹四三五本にして本年迄十二年間を經過するも一個も用に堪へざる爲め除かれたるものなし其の内只一二が一九〇三年に少しく腐朽するを認めたり是れを試驗するに全く乾燥不充分なる爲めに藥液の注入せられざりし部分ありしに依る元來夏季に伐採せるものは其の割裂を防ぐ爲めに一部偶數の番子を附けたるものを徐々に乾燥せしめたり其の爲め水分の含める部分の殘留せるものありしなり第六のものは紅色心材を有するに關らず全く腐朽の跡を見る事なし是れ從來紅色心材の枕木に適せすと云ふに反し藥液注入の良好なりしものより長きに堪ゆるを證するなり

著者の本試驗に對する結論は左の如し

1、健全なる白色心材を有する掬材は「クレヲソート」を含有するタールを注入する時は最も適當なる枕木として用ゆるを得べし而して鐵道主線に於て二〇—二五年間は少くとも堪ゆるを得べし

2、紅色心材の掬材も又危害なしに枕木に用ひ得べし唯紅色部が横斷面の二五%以上に上らず且つ其の面の上部に表されざるを要す灰色に腐朽せる心材部は全く用に適せず

3、森林家は枕木の目的に對しては唯健全なる掬材のみを撰び腐朽を招せる部即ち大なる朽枝のある部分の如きは必ず之れを區別し除くべし

4、藥液注入の前に掬材の枕木は全くよく乾燥せらるゝを要す

5、掬材の枕木の割裂を防ぐ爲め伐採後適當なる方法を採るを要す殊に早暑長時間日光の直射する位置に之れを曝露するを禁ずべし

文苑

竹馬の友垣

盲蛇

予が十一二歳の頃齡恰も予と等しき大澤となんいへる友ありけり其性一も予と似つかはしきことなかりしも鬲てなく睦み親しみしこと類ふへきものもあらず崇敎館といへる學校の往來かつは野に山に遊べる二人ならでは花も日も明けぬ心地なりけり予は人々から意志弱く忍耐乏しく只管筆墨にのみ親しみ戸外の遊戯は餘り好ましからさりきこれに引替へ友は學びの暇には野に狩り川に漁りて家に居る事ぞ稀なりける友の親御の友をして務めて予に親ましめしも一はかく異なれる性の調節を取られんとの御心曜を繰るにはあらで一六とか三八とかいへるなかゝいつの代も變れる事なきは休暇の前日となれば明日の遊戯の企にぞなる予はいつも友の提案に任せるなりうは季節によりて色になるも初夏は鎌田堰へはや釣りに行く其道具は皆友の手に成り餌の準備場所の撰擇道の案内一に友任せにて予は恰も木偶の如く動けるのみなり唯釣り揚くる丈は自ら浮の呼吸を計りてするなるがられすら友は已が浮は餘所にして只管予の方にのみ目を注き「まだ」とか「よし」とか合圖せる心盡しかくして幾度も練習の結果其手心も解りて潑溂と釣に懸りし時の愉快さ得も言はすなりぬまだ東雲の朝霧立罩めしころ肌に觸る風和にはと心地よしやがて蘆の中にて賑はしく鳴く鳥あり友は「彼はよしきりなり」と敎へ其鳴音を心して聞き給へ「ゝ、シカイ〳〵シ、ナカノヤヤネクリン〳〵」といへるに非すやと予はたがしく覺えて其後この鳥の聲を聞く毎に惱裏に合はせ試むるに實によく此樂器に適へるは面白けれとあたら優美な曲譜にかゝる聞き苦しき歌合はせられては鳥も本意ならまじ其他茸狩野遊び一としして友が指導にならぬはなし友はまた刄物扱に極て堪能にて趣く巧に造り成したる遊戯の器具など必ず二個宛造りて予に分てるなり。かくも予に親切にして實物教授の指導者たりし友や行漸定かならず昔し語り懷を述ぶるよすがもなく只鬱深き東雲よしきりの囀り見る度聞く毎君を慕ひ昔を偲ぶのみゞ口情しき

此君漫錄

竹軒

○世間竹を以て號とする者頗る多し志かいふ僕も亦其一人なり竹を號とするは固より之を愛好するに出づ

◎竹を以て松梅に併せて歲寒の三友と稱するは其節操に取る所なるは云ふ迄もなけれど又其風姿の誠に愛すべきものあるに由れり凡り水村山部竹あれば俗ならずまして竹林の中に構へたる家は如何なる人の住居ならんと先づ奥床し

○竹は四季共に佳也鶯は春に囀り蟬は秋に吟じて轉々清韻を增すさは云へ特に適せるは暑月なり竹窓徐ろに清風を送るは云ふも更也已雨一過玉を跳らす光景に至りては爽然颯然腋下自ら凉風の湧くを覺ゆ若し夫れ月夜に至りては竹影婆娑として閑庭に明窓に墨痕淋漓たる名畫を寫し出し或は瀟露月光を掬みて珠玉亂ゝなど幽趣盡きす

○冬は霰にさわく風情も可なれど更に妙なるは雪中の竹也琅玕の玉の色雪に映じて益々綠に高潔優雅多く匹儔を見ず偶々小雀來りて梢上に戲るゝ時雪墜ち竹反して

雀驚き去る

○古來竹を好むもの何ぞ限らん梁の孝王は竹園に名を止め普の七賢は竹林に清談を肆にしぬ晉の王子猷は面白き男也暫くの借家住居にも必ず竹を栽ゑて樂みけり或人かくては煩はしからずやと云ひけるに子猷嘯き詠めつゝ良々ありて竹を指して「一日も此君なくてはあられぬものを」とて亦他語なかりきとぞ之れ此君の異名の因て起る所

○宋の司馬温公の獨樂園中には釣魚庵以採花圃、弄水軒などに並びて種竹齊あり折々は温公自ら斧を操りて竹藪に入り鬱茂を切り透して樂める事記中に見えたり

○蘇東坡が一僧の爲に其綠筠軒に題せし詩に曰く

可レ使食無レ肉、不レ可レ居無レ竹、無レ肉令人瘦、無竹令人俗一人瘦尚可レ肥、俗士不可レ醫　傍人笑此言、似レ高還似癡、若對此君仍大嚼

世間那有揚劭鶴

肉瘦せて身鶴の如く仙骨稜々たる者にして始めて竹の友たるに足らむ苟も此君に對して尚牛飲馬食を貪らんとするが如きは俗士の俗士たる所以抑々又慾深鈴の世迷言出來ぬ相談なり

○僧清順の詩に曰く

城中ノ寸土如シ寸金、幽軒種レ竹只十箇、春風慎勿レ長兒孫、穿我堦綠苔破

兒孫とは筍をいふ竹の周圍に環り立てる樣兒孫の父祖に於けるが如ければなり面白き形容詞なり又雅子とも龍孫ともいふ此詩は竹を愛するやら愛せぬやら一寸分らぬ樣なり土一升に金一升の城下なりとて既に十升を栽ゑながら筍を生やすなとは無理な注文とはいへうんな理窟を離れて面白き詩なりと知るべし

○王摩詰の竹里館の詩には曰く

獨坐幽篁裏、彈琴又長嘯、深林不人知、明月來相照

幽篁裡は誠に高士の住居と見ゐたり琴の音は竹幹に響きていかなる妙音をや發すらん聞く人なきぞ惜みなる

○白樂天の着竹記には曰く

竹ハ本固シ、固以テ樹レ德ヲ、竹ハ性直、直以テ立レ身ヲ、竹ハ心空シ、空以テ體レ道ヲ、竹節貞、貞以テ立レ志ヲ、故ニ君子樹レ之ヲ、

斯樣に窟責めにして愛する道德家もあり

○漁翁夜沿ヲ西岩宿、曉汲ヲ清湘ヲ燃ヲ楚竹ヲ、日出テ煙消ヱ不レ見レ人、欸乃一聲山水綠

之は柳宗元の詩漁翁自ら風流ありといふべきか

○李義山の詩に試レ墨ヲ書ス新竹ヲ、張レ琴和ニ古松ニ、とあり書家は好みて芭蕉の葉なぞに揮灑す亦一韻事たるを失はず

○五雜組には曰く

竹樓數間、負レ山臨レ水、疎松脩竹、詰屈委蛇、怪石落々、不レ拘ニ位置ニ、歲ニ書萬卷其中ニ、長几軟榻、一香一茗、同心良友、間日過從、坐臥笑談、隨ニ意所レ適、不レ營ニ衣食ニ、不レ問ニ米鹽ニ、不レ叙ニ寒暄ニ、不レ言ニ朝市ニ、丘壑涯分斯極矣、

廣瀨談窓の隨筆中にも

窓欲レ有ニ淨几明窓ニ、不ニ必華麗ニ、園欲レ有ニ疎松瘦竹ニ、不ニ必廣大ニ、水不レ要レ深、取ニ其清冷ニ、山不レ要レ高、取ニ其平遠ニ、幽居勝概足矣、

とあり松と竹とは幽居に闕くべからざるものなり

○竹醉日とは五月十三日を云ふ此日竹を栽うれば必活くといひ傳ふ多少氣節に關係ある事ならんうは兎まれ其名目の何ぞ雅致に富めるや

○孟宗竹の名は普の孟宗より起る孟宗は二十四孝の一人也繼母筍を好み冬月之を求めしむ宗竹林に入て慟哭し笋爲めに生ずといふ

○古代には紙なし故に縑帛に書す尙古代に溯れば縑帛を用ひずして竹簡に漆を以て書せり其法先づ火を以て竹を炙りて汗せしめ共青を殺ぐ斯くすれば書き易く又蠹む事なし之を殺青とも汗簡ともいふ後世史書を汗青といふは之に基づく

○酒の異名を竹葉といふ古詩に竹葉清香好、何妨飲ニ數杯一、といひ白居易の詩に甕頭竹葉經レ春熟とある是なり蓋酒を釀する竹葉を以て其中に交ふれば極めて清潔也故に酒を竹葉といふとぞ國語に酒をサヽといふは或は此に本づくか或は只サケのサの字を重ねたるまでにや

○筍には一種の雅味あり或は羹とし或は竹の子飯となす山館の常食時に或は玉堂の珍羞となる白居易に食笋詩あり

此州乃竹鄉、春笋滿ニ山谷一、山夫折盈レ拘、拘來早市鬻、物以レ多爲レ賤、雙錢易ニ一束一、置ニ之炊甑中一、與レ飯同時熟、紫筍折故錦、素肌擘新玉、每食遂加餐、經旬不思肉、久爲京洛客、此味常ふ足、且食勿踟躕、南風吹爲竹

居易の竹の子好きなりし事見えてをかし

○竹中に兒あること印度大寶廣博樓閣經及後漢書西南夷傳に見ゆ共經文中の說話に曰く往昔三仙人あり法の爲に觀喜踊躍し

て捨身す其沒所に三竹を生せり金葉玉根香氣芬馥たり十月にして自ら割裂し各々竹內一童子を生ず顏貌端正光色殊麗なり竹下に結跏趺坐すること七日皆正覺を成じ其身金色三十二相八十種好具はらざるはなし云々と我が竹取物語は之より脫化して更に奇を極む彼の最勝端嚴なる赫奕姫が公子王孫の綵を嘲り國王の招きにも應せずして遂に天上に昇り去る所諷刺あり滑稽あり又竹の爲に萬丈の氣を吐けるものならずとせず

○竹の歌古來勸からざれど吟詠に堪へたるは鮮し寧ろ俳句に於て見るべきか

筍や甥の法師の寺訪はん　仝
若竹や村百軒の麥のたど　仝
若竹や曉のあめ宵のあめ　仝
行水や竹に蟬なく相國寺　失名
かりりめに植ゑし村竹いつしかも
かき曇るべくなりにける哉　千蔭
呉竹を萩より先のやどりにて夜々
すゞし軒の下風　宣長
呉竹のよはの白露かせこえて葉分
の月のかげぞこぼるゝ　仝上
霜こほるいさゝむら竹さらく〳〵に
霰ふる夜は夢も結ばず　春滿

偶感　盲蛇生

世人動もすれば教育家を稱して地味なる人間といふ一應首肯せらるゝ評なれどもうは人間其者が地味なるにあらずして執る所の事業が地味なるなり凡人の事業は千差萬別枚擧に遑あらずと雖とも余は今試みに派手と地味とに大別して教育事業のいかなるものなるかに付述る所あらんとす」由來派手といひ地味といふ其名の由て別るゝ原因はいづこにあるかといふに只其効果の成敗が世人の眼前に提供せられて黑白の鮮明なるか否とに由るものなりと謂ふを得べし例へは等しく是醫師にして白刃一閃胸腹を折開し或は四肢を切斷する如き見るものをして座に心膽を寒からしむ而して其死すべきは死し治すべき治すること數日を出でずして解決するものは是外科醫の派手なる所以に非ずや苦辛慘憺幾多の歲月を費し手を替へ品を替へ治療に尽瘁せるも患者は即ち依然たる患者にして些の見るべきものなき是內科醫の地味なる所以に非ずや其他爲政家の如き軍人の如き總ての實業家の如きは概ね前者に屬し宗教の如き教育の如き主として精神界に關るものは概ね後者に屬するものとす

抑精神教育なるものは酒を飲んで直に愉快を覺え菓子を食うて忽ち口腹を喜ばしむるが如くしかく現金に其効驗の著はるゝものに非ず必ずや其深遠大なる理想一定不變の方針巧妙なる教授術高尙なる性格の幾多の年月と相須て始て其効果の認むべきものあるを信ずるものなり

又其服務の上に於けるも一時を苟偸し其日を濟ます者も熱心勤勉日も亦た足らざるを恐るゝ者も生徒に及ぼす効果の左まで即席に影響するものに非ざるより故に教育事業は勤勉家の務甲斐なしと嘆つ所以なるべし世人動もされは無賴漢墮落者等の生徒中より出づるを見れは嘖々鼓を鳴らして教育者の無能を云爲す然れども教育者の効能が人物養成の上に容易に現はれざるなり兎角生きたる人間は理想の模型に押し詰めて製造し得べきものにはあらずどこにいかなる呼吸のあるものにや同一の模型の中から突飛な英傑が跳出す事もあれば頓間な凡骨が轉げ出づる事もあるに非ずや錐は如何に囊中に藏むるとも時に及んで銳喉し苗は何程抽かんとするも輙く伸びるものにあらざるなりされば井上博士も「私德は猶在の時一念隱微の處より刷新し來るにあらざれば之を修むる端緒を開くこと能はずは他律は到底効力なし」と斷言せられたるは穿ち得たる言葉なるかな

木曾義仲　植松操

古今を通して義仲程變化の多い生涯しかも悲慘な最後をとげた人は澤山ないだらうと思ふ

幼い時に両親に死に別れ風前の燈火より危ない命を木曾に生き存へ時の來るを待つて山吹城に白旗を立て一戰又一戰等差級數的に勢力を以つて京に上り天下の人を吃驚させ武人の最極と云はるゝ將軍と迄でなつたしかし夫れは長い事ではなかつて從兄弟義經兄弟の入京と入り代つて義仲の勢力は先の朝日の昇る樣な勢に引替て入日の樣な感がする斯くて義仲は粟津ケ原にもろくも悲慘な最後をとげたしかも國賊の名迄負ふて要するに義仲は一日の日の樣な生涯を送つたのであつた彼の入京の途次は朝であつたりして京都に在つては最も得意の時代即ち正午粟津ケ原は彼に取て夕暮であつたのである

山　F　樵史

塵の世をはなれた淸い山、樹木が心地ようて茂つて、峰は高く美しく谿は深く幽に、綠が滴るが如く靑葉が薰つて、吹く風までが薰を含んでゐる、其の中に幾多の小鳥が長閑に太平を謳ひ、溪水は玉を轉す樣紺碧の水が、潺々岩に堰れて水晶の飛沫を散らす

等、實に山は幽趣を含んでゐる、活畫である、かゝる清い山水の眺めは、一大厦高樓の麟次櫛比し、車馬絡繹たる都には、どうでい求むることができない賜であらうあゝ……山は平和の都、美の極致である自分は將來、この山を相手に活動する事を樂しむ者である

通信

學校通信

○七宮先生を迎ふ　久しく伊藤先生の後任は缺員中に有之候處七月十四日を以て元三重縣立農林學校教諭にして林學科主任たりし七宮林學士本校に轉任せらるゝことゝ相成仝日午後一時二十分より雨天体操場に於て新任の御挨拶ありたり

○實習　七月十七日より開始の第一學期試驗は仝月廿五日終了したるを以て二十六日より二十八日迄毎日山に入り下刈の實習仕候炎天燒くが如く作業は隨分苦痛を感じ申候

○終業式　七月廿九日午前七時より生徒全体は分れて各教室校庭等の大掃除を行ひ八時職員生徒一同雨天体操場に集合校長終業の詞として本學期は訓育上比較的優良の成蹟を示したるを悅ばれ尙進んで一層修養の功を積み校友の發場を期すべきを常希望し且林業中は父兄長上に對して孝友を怠らず衛生を重んじて身体を鍛錬すべき事杯懇々訓諭する處あり八時半終了せり

○北村先生赴任　德嶋縣立農林學校林學主任教諭北村正夫先生は七月二十五日附を以て當校奏任教諭に轉任(九級俸下賜)せらし八月五日着福せられ候

寮より越

何を申してもエキザミネーションといふ危險物に取付かれては猫に覗はれた鼠同然一分の隙もあつたものに候はずさりとて亦此奴ばかりに氣を取られぬては尙一層恐ろしきヒンスといふ厄病神が控へ申候故右も向けず左も向けず候、とは申すものゝエキザミネーションとてうんなに恐がるにも及ばず候畢竟平常の呑込如何にあり何もあわて騒ぐべきものなりとの定義は無之候所謂其エキザミネーションも二十五日にて無事終了いたし候に陰を以て赤い奴も青い奴も青色均一と相成申し候

實習には健康者許り殘りをる事とて中々の元氣に候然し暑い奴には聊か參らざるを得ず候

毎晩の夢は暖い故郷の空とた察しの通り二十八日には成蹟發表出で候悲觀の顏樂觀の顏等種々雜多の人によりて現はされ候

福島便り

征矢野生

何處も同じ梅雨の候唯さへ濕り勝ちなるに分けて連日の降雨は更に其度を加へ誠に鬱陶敷く御座候殊に外にも出られず室内に閉じ込められ天井を睨んで座敷の中央に兀座するの無趣味なる生活は既に十數日を繰返し体にカビも生せんかと怪しまるゝ位に御座候されば木曾川の水量も漸く增加して六月廿六日には增水將に八尺に達し沿岸の家屋浸水したるもの數戸を出すに至り申候七月二日よりは木曾の名物たる馬市例年の如く當町に開催せられ申候連日の降雨に馬の數も少なかるべしと思ひの外二日目あたりより寄り集りたる馬は千を以て數ふるに至り之れにつれて出で來りし人は町内に滿ちみちて近年まれなる盛況を呈し候惜しむらくは雨の尙晴れざる事に御座候、四日目よりは天氣恢復致し候爲め到る所に露店を張り之れに集る山出し連中夢中になつて山師の說明に半日を立ち暮すなどなか〳〵に面白くにぎわしく御座候四日の晩には馬の鐵道往生有之中央線開通以來の珍無類の出來事に有之候うは馬市の爲め曳き來りしもの此晩何物にか驚かされ厩より逃げ出して當市を去る東約一哩の所に至り折柄進行し來れる貨物列車と衝突し無殘にも七頭枕を並べて轢死致し候其現狀を目擊したる人々の話を聞きしのみにても身の毛のよだつ思ひ致し唯々ふびんの至に御座候翌日之等の死体を運び來りし時などには一層哀れに涙もろき婦女子は早や涙の溢るゝを見受けられ候之れが爲め衆人をして更に汽車に對する恐怖の念を高めたる事と存ぜられ候

右は馬市の概畧を申上げしのみに御座候馬市後ば又當町の有名なる御輿祭り有之べく候へば筆を改めて御通信申上べく先は今回は之れにて失敬仕り候

臼田小林區署内金田美行君より

拜啓其後は御無音に打過居り誠に申譯無之候向暑の砌校長先生始諸先生には御障も無御暮し被遊候哉只今第一學期試驗準備の爲定めし御多忙の御事と存候小生も幸ひ立科山麓に駄食罷在候間乍他事御休神被下度候當小林區署は毎年是年までは二百町歩宛造林致し來り候へ共本年は三百町歩の新植有之明年よりは六百町歩宛造林の計畫の小造林の主任としては駒場農科大學出身の前嶋林務技手にて候右年々の植林面積中二分ノ一は私の受持第一號臼田保護區官舍部内に有之頗る多忙に有之先月中も立科山國有林造林地と拵(百二十五町歩)監督致し居二三

日前歸着舊新聞を見れば過日の暴風の爲新築中の校舍は不幸にも倒壞せられ候由誠に殘念に存候

當地は民地の如き直徑七寸高さ五間位の樹木は澤山根コギと相成直徑四五寸高四五間のものは悉く斜となり國有林の如き三十六年及三十七年の兩年度に植栽せる三百五十町歩の落葉松は悉く十五度以上の傾斜を爲し見るも無慘の有樣にて候

校友會へも御無沙汰致し居候へ共幸會員諸君の御熱誠を以て益發展の趣何よりの御事と祝上候岐蘇林友も亦一層の進境にてうれしく拜見致居候只憾くは同窓會員の消息は全く知る事を得ざる事にて候母校を去り諸處に散在すれば同窓の消息を知り度は恰も在校生が卒業生の消息を知り度よりも一層切なるもの有之候同窓が音信なきに於ては己を得ざる次第に候へ共切めて校友雜誌に辭令欄丈にても設けられ度ものに候小生の知れる範圍に於ては必ず御報申上べく候此事は小生一個の考許にても無之二三同窓に計り候處何れも大賛成を表し候へば校友諸君も是非御賛同之上右樣御取計願上候尙其中には自然同窓諸君よりの音信も增加致事と存候先は(七月十三日着)

青森縣上野郡横濱村横濱小林區署より　本多清右衛門君

久々御無沙汰いたし誠に失禮いたし候段乎に御海容被下度在校生諸氏には目下學期試驗の御事と推察仕り候小生には不相變青森の山奥に赴任以來己に三歲無事斯業の爲め務め居り候間乍余事御放念被下度却說岐蘇校友も日增しに盛んに相成毎月面白く相讀致居り候尙益々御奮勵あられん事を希望に堪へず候小生も不及ながら投書致度とは思へど職務に忙殺せらるゝと元來の筆無精にて失禮致居候

目下小生等の事業としては造林手入並に森林撫育林道工事害虫驅除等に有之候之等に對する實地調査致し諸氏に御知らせ申し度きは山々なれども小生は外業の方は殆んど致さず殆んど内業に從事致し遺憾ながら實地の調査を爲し難く何れ又折を見て調査を爲し御知らせ可申上候

(別紙掬材の試驗山林公報所載のもの諸氏の參考ともならば幸甚(七月廿日着)

農科大學林學實科入學試驗失敗談

第二回卒業生　川岸滋次郎

兎鳥早々余等第二回業校生の會門を出てよく既に六星霜を閲せり宜なる哉光蔭矢の如しと余は卒業後直に新潟に赴き月を閲すること十八にして兵營の麥飯を食すべく三十九年十二月一日金澤野砲兵第九聯隊に入隊一ケ年の勉勵空しからず四十年十一月三十日に陸軍砲兵少尉に任陸軍歩兵軍曹の辭令及野砲兵科一年志願兵終末試驗に及第證書を受け聯隊長に暇乞して翌の生じたる心地して營門を出で明治四十二年十二月二十八日に陸軍砲兵少尉となる其三月下旬足尾に赴任せり其當時は幾多の希望胸に滿ち奮發一番古河家の爲め一身を提供して會門の勢力を一地區に畫せんものと決心したり

心理學者の云ふ如く人の思想は時々刻々其時の事情周圍の境遇に依りて變化をなすものなり余の入社當時の同期生下條氏の一地に主任たり一期後なる山下氏又主要なる事業箇所に次席たり依つて余會門出身者の足尾に於ける地歩の堅固なるに心を强ふするを得たり然して其年七月調度課長の更迭となり翌四十二年五月下條氏の退職となり四十三年八月には山下氏の退職となり庶豫課には土砂杆止の爲め宿入洗省氏來りしも一年志願兵に服役し其後任として原田久保作氏來る然れども足尾銅山の專間の林業たる調度課に於て行ふ林業には會門出身の微々として振はざる事其極に達せり煩悶時代は此の時の事なるかな即ち余にして足尾を去らんか會門勢力の基礎は全然「ゼロ」なり此所に居らんか日々快々として樂まず

然くとて他に運動せんとするも濡手に粟的の事も無き樣なり茲に於て考ふ林業界の中堅となりて世に處せんとするには更に進んで勉强せんに如かずと而して高等學校に入らんか年齡已に二十有六歲學士の稱號を得るには三十四五ならざるへからず

然らば他なし盛岡或は廣兒島の高農に入るべきかと茲に於てか明春を待て愛驗準備をなさんと考へつゝある其失先五月六日の官報は吾等にも農科大學實科の入學資格を與へたるを二十二日に至つて始めて知り二三日考へたる後同校に問合せたるに間違なき旨の返信六月二日に到着せり余の實科受驗の決心をなせるは即ち此日なり直ちに國元の父に昔の教科書及卒業證書送附せられたき旨の信書を出したりしに振り出し局の間違にて足尾に廻り十三日に至るも到着せず爲めに願書には卒業証書を想像して書し提出せり而して教科書の小包は十五日に到着し二十日に受驗票來る之にて先づ受驗に差支なきも卒業後滿六ケ年と四ケ月間も放棄しありし徵の生へたる頭たるを如何せん而して身体檢査の爲め二十九日までに駒場まで出頭せよとの事なり餘日は二週間に足らず而して銅山方の仕事は明春造井地の測量及地拵計畫本春新地の下苅事業計畫を受負人との折衝の爲め片時の余暇なく寸毫の勉强を許さず斯くして七月二十五日も過ぎ二十六日東京を目票に出發せり二十七日午後

六時頃東京府下中澁谷町道玄坂なる下宿屋バレン屋に投宿して來る七月三日より始まるべき試驗に對し準備を始めたり、試驗科目及日割は左の如し

七月三日國語漢文作文七月四日物理幾何三角七月五日動物外國語七月六日植物化學七月七日代數

國語漢文の復習は全然止めにして動物植物を讀み終り二十九日の身体檢査を受け英語は止めにして物理を始め數學三科の例題丈け目を通せば最早三日となりて化學は更に見る事能はず斯くの如くにして試驗始まりたり第一日は無事通過し第二日目は物理は皆知り居れば譯もなし幾何三問は解きたる積りにて一問外れ三角は公式遂に思出でずして終り第三日動物は五ッの動物名の內われから及夜光虫の部門を知らざれば答る能はず他の三は問悉く出來英語は五問の內二問だけ出來三問不出來第四目植物の譯もなく化學には四問の內完全なるは一問のみ第五日の代數は一つと因數分解のa題を解きd題は終り解けず二つ目の應用問題は完全に方程式二次を作り解き三つ目は分數積數の問題にて更に不解四つ目は$(a-b)+(a^2-2d)+(a^3-3b)$……のm項總和を求めありしを一を十に間違へ斯の如くして試驗を終りた要りするに此の試驗の失敗は英語、數學及化學なり其內英語中學卒業生と多大の相違あるも數學化學は今少しく勉强したらば恐るゝに足る處なし余の如きは今日まで中學生を非常に恐れありしがいざ競爭となりては多大の差なきものなり余と同宿の受驗生三名ありしが皆中學卒業生にして三名共七月十一日より開始し一高受驗のものなり彼等は皆少くも四ヶ月或は一年、二年の準備をなせるものなり余の如き僅に五日間の準備にて試驗を受くるものは恐らくは一人なからん而して同樓の一人は春以來士官候補生海軍經理學校の試驗を受けたる旨云ひ居りたり此等のものにして尙今日の英語或は動物或は數學に失敗せりと斯の如き有樣なれば會門の出身なりとて勉强次第には左迄で見切たるものにもなし

會門の出身者諸君よ我が同胞よ兄等若し氣あり慨ある諸君あらば進んで高等の敎育を受け林業界の中堅となりて兄等の弟諸君を指導し帝國の否東洋の林業界は會門の出身者ならざれば共に談ずるに足らずと迄での輿論を惹起せしむるは掛りて余等同胞の覺悟一つにあり是より盛岡鹿兒島札幌駒場には門戶を開放して諸君に來れと絕叫しつゝあり今にして兄等奮ふ所なり一時の泰平を偷まば他日林業界の門域より放逐せられて悔ゆとも歸らざるの日あらん聞くに余の前に助手を勉めありし新潟縣立加藏農林より最早盛岡に二名を出し一名は現に林學科にありて特待生たりと諸君猛省せられよ

明治四十三年度校友會收支決算報告

一金參百六拾四圓六拾參錢五厘也總收入
一金參百五拾四圓四拾錢也總支出
差引金拾圓貳拾參錢五厘　四十四年度へ繰越

內譯

收入之部

一金參拾圓八拾五錢五厘　四十二年度より繰越金
一金貳百九拾壹圓貳拾錢　在校職員及生徒會費收入高
一金三十二圓五十八錢　卒業生會費收入高
一金拾圓　矢拂下金
計金參百六拾四圓六拾參錢五厘

支出之部

一金百六圓九拾參錢　雜誌發行費
一金參拾五圓八拾七錢　庭球部費
一金拾七圓七拾錢　庭球選手補助費
一金參拾七圓七拾錢　例會及監時會費
一金貳拾圓拾六錢　弓術部費
一金五圓　遠足部費
一金拾四錢　擊劍部費
一金參拾七圓四拾五錢四厘　運動會費補助費
一金參拾六圓九拾七錢八厘　通信費
一金五拾六圓四拾五錢八厘　雜費
計金參百五拾四圓四拾錢

右決算報告之通り有之候也

明治四十四年七月廿八日

木曾山林學校々友會
庶務會計部顧問　征矢野茂樹

客員會員轉任敍動

帝國林野管理局技師　松田　力熊
敍勳六等授瑞寶章　川崎　本雄
叙正八位下高井郡立農林學校助敎諭陸軍步兵少尉　兒野　榮
任下高井郡林業技手　中島　昌利
任長野大林區署森林主事　若林遊龜尾
任仝上雇　長谷部兵治
任仝上雇　木村鍬次郎
任三重縣林業技手　武久貞一
任仝上

編輯部より

極暑の候先輩諸氏には如何御暮し被下度候や定めし御壯健にて夫々御勤務の御事と推察仕り候降而在校生一同御陰を以て相變らず無事消光罷り在り候間乍他事御放念被下度候從來發行致し居り候岐蘇校友も遞信省に交渉の結果改めて岐蘇林友と命名する事に依り首尾よく第三種郵便物として取扱はるゝ樣許可相成り會の經濟上其甚だ合よく相成り申候、回顧すれば生等不肖每號其体裁を欠き遂に諸君の滿足を買ふに至らず甚だ汗顏に堪へざる次第に候來學期よりは不及ながら充分に職責をつくすべく候間何卒御諒恕被下度先は右暑中御伺旁々御詫迄一言申述べ候匆々

編輯部員總代
木下稗藏
角田久福

明治四十四年六月十四日遞信省第三種郵便物認可